

大きな釜を抱えた僧が順に飯をよそっていく。

えっ、これだけ？ もう少し下さい、と喉まで出かかると、欲を見せるのははばかられる。おかずは、モヤシしか入っていないスープに、青菜、椎茸、大根、瓜の付け合わせ。タクアン一切れは、「最後まで食べないように」と言われる。

韓国慶尚北道、金泉市の奥深い山中にある黄岳山直指寺。開かれたのは、新羅時代の418年。文祿・慶長の役で豊臣秀吉の軍にほとんど破壊されたが、その後再建された名刹だ。

ただ広い講堂で、灰色の作務衣を着けた日本からの巡礼者はみな、神妙な顔つきで食べている。しゃべってはいけない。動く口元を人に見られてもいけない。暮れかかる山に蟬時雨が降りしきる。

前日の8月6日、慶州市のこれも名刹の佛國寺。九州をはじめとする日本からの巡礼団107人に、同市の市長や韓国仏教文化事業団の幹部らも出席して、韓国三十三観音聖地への開創式典が営まれた。佛國寺や直指寺など33の寺を、韓国の仏教界が巡礼地として定めたのだ。

日本には、弘法大師の霊場を巡る四国八十八か所や三十三観音を巡る九州西国霊場など、あまたの巡礼地がある。韓国仏教にはそれがなかった。

「心情に共通するもの」

安寧求め韓国巡礼

山中の名刹 修行体験



2008 韓日観光交流年(韓日観光交流年) 「韓国33観音聖地」巡禮團 訪韓 記念 2008. 8. 6 / 佛國寺



口元を人に見せないのが食事のマナーだ

ある韓国にも霊場巡りをくれば、旅行を通じた交流がもっと深まるんじゃないだろうか。日本人も韓国人も、心の安寧を求めている今の時代だからこそだ。大手旅行会社を中途退社した後、「トラベルジャーナル」や「観光経済新聞」の九州支局長を務めた寺崎嘉幸さん(62)（佐賀県鳥栖市）がそう思いついたのは昨年夏。韓国の寺の数々を

4000キロのドライブで訪ね回り、韓国観光公社のソウルの本社や福岡支社、両国の旅行会社に話を持ち込んだ。「韓流ブームのような一過性のものじゃないものを、旅行を通じてつくりたかった」



これが直指寺の夕食。一切れのタクアンが重要な役割を務める

多い中で、「私もそうです」と答えかけて、実は2度目だと言いついた人がいた。長崎県佐世保市から来た神田洋子さん(71)だ。

「次はソウルの近くのお寺にお参りしたいですね」 夕食の後は、境内で茶を供養する儀式だ。三日月が傾きかける山に、この夏初めて聞くツクツクボウシの鳴き声。北斗七星が手に取るように近い。

アジア座 VOL.17 GIMCHEON BUSAN SASEBO DACCA MIYAZAKI

